



アザラシ胃製容器

北海道アイヌ

長さ 45.0cm、高さ 38.8cm

北方民族博物館だより  
—36号—

第14回北方民族文化シンポジウム	2
事業報告 北方文化セミナー	5
講座「オホーツク文化遺跡の立地」	6
お知らせ	7
News	8



## 第14回北方民族文化シンポジウム

## 「北方諸民族文化のなかのアイヌ文化—生業をめぐって—」

於：網走セントラルホテルシンポジウム

本シンポジウムの目的は、今後30年にわたってさまざまな文化要素を比較し、北方諸民族文化におけるアイヌ文化の位置づけをさぐるうとするものです。今回は、狩猟・漁撈・採集などの生業文化を対象とし、資源利用のあり方、生業の技術などを検討しました。以下に各発表の要旨を紹介します。

## ■佐々木利和（東京国立博物館）

## 「アイヌ文化の歴史と生業」

従来から狩猟・漁撈・採集に加え、交易がアイヌ文化の核をなしていると考えているが、本発表では、酒と漆器、マキリを対象に、アイヌ文化における生業と交易とのかわりを考察する。

酒に関連するアイヌ語の多くにもちいられている「シャケ」は、日本語の「酒（サケ）」の借用語であり、酒が本州からもたらされたことを示唆している。アイヌにとって、酒は儀礼上必要なものであり、そのための器も美しく特別なものが要求されたため漆器が着目された。漆器は、15世紀頃に交易に伴う挨拶儀礼（ウイマム）とそれに続く酒宴をとおして本州から伝わった。その後18世紀以降に安価な漆器が大量に出回ることによって、一般のアイヌにも酒を伴う儀礼が定着した。

次にアイヌが常用する利器「マキリ（小刀）」について考えてみたい。コシャマインらの戦争（1456年）はマキリをめぐる口論がきっかけとなったが、このことから当時アイヌは、和人から鉄製品を入手していたことが示される。アイヌは高度な鍛冶技術を持たなかったが、これは彼らが交易によって鉄製品を入手することができたためであろう。一方、アイヌが鋭利な刃物を要求したのは、本州との交易が進み、毛皮や干鮭を大量に生産する必要が生じたためであると思われる。

## ■出利葉浩司（北海道開拓記念館）

## 「アイヌの狩猟具—とくに罾をめぐって—」

これまでアイヌの狩猟活動に関する民族誌では、毛皮獣狩猟についての記述はほとんどなかった。本発表では、クロテン、キツネ、カワウソなど、小型の毛皮獣を対象としたアイヌの狩猟活動とその道具である「罾」をとりあげ、その種類や機能

を紹介する。

「仕掛け弓」は獲物の通り道に仕掛けられ、張った糸に獲物が触れると矢が発射される仕組みの罾である。これを縦にしたような形で、獲物を弓の力で挟みつける構造のものもある。また、木の枝の反発力で獲物を川に落とす罾がある。川を跨ぐ倒木の上に設置され、クロテンがぐりぬけようとすると輪が締め、木の枝がパネの働きをしてクロテンを川に落とし溺死させる。獲物を押しつぶす罾もある。木を組んで作った簀の子の一方を少し持ち上げ、上に石を載せた状態で仕掛け、獲物が簀の子の下の餌を取ろうとすると支えが外れて簀の子が落ちる仕組みになっている。

これらの罾は、おもに小型の毛皮獣を捕るためのものである。そして仕掛け弓を除いて、挟んだり、叩き落として溺死させたり、押さえつけたりといった、毛皮に傷がつかないような工夫がされていることに注意する必要がある。このことは、毛皮獣狩猟が食料・生活物資の獲得ではなく、交易のための狩猟活動であったことを示している。

## ■アナトーリ P. スタルツェフ

（極東歴史学・考古学・民族学研究所）

「アムール流域・沿海地域のツングース諸族の  
伝統的および近代的生業活動」

アムール下流域と沿海地域にはナーナイ、ネギダール、オロチ、ウデヘ、ウリチなどの先住民が居住してきた。彼らの伝統的な生業は狩猟、漁撈、採集であった。

ウデヘとオロチは狩猟を主要な生業活動とし、副次的に漁撈もおこなっていた。一方、ナーナイ、ネギダール、ウリチの主要な生業は漁撈で、狩猟が副次的な位置を占めていた。また、採集は狩猟、漁撈に次いで重要な生業だった。

狩猟の対象は、おもにヘラジカ、イノシシなどの大型有蹄類とクロテン、カワウソなどの毛皮獣であった。有蹄類は一年中、毛皮獣は10～3月に狩猟された。獲物の肉は食物として、皮は衣類や靴、袋物の材料などとして自家消費され、毛皮は交易にもちいられた。

先住民は一年中漁撈をおこなっていたが、特に



重要なのは6月～10月のサケ類（サケ属7種）の産卵期であった。彼らは大量のサケ類を捕獲し、冬季の食料として貯蔵した。

女性は晩春から秋にかけて、植物の葉、根、果実などを採集し、食用・薬用としてもちいた。

ソビエト連邦時代に、先住民の生業活動は大きく変化した。多くの先住民が集団農場の労働者となり、彼らの文化や生活様式は変化した。こうした変化は、アムール下流域・沿海地域の先住民の伝統的な文化、生業活動の保存に影響を与えた。



#### ■佐々木史郎（国立民族学博物館）

##### 「アムール、沿海地方、樺太における 毛皮獣用の罠の分布について」

1995、96年のロシア連邦沿海地方の民族調査では、ウデへの伝統的な罠類の復元をおこなった。本報告では罠の分布と、それらが普及した背景を考察する。

調査対象としたのはドゥイヤフカ、ラギなど、おもにクロテンを対象とした7種類の罠である。同形式の罠がアムール地方のツングース系住民にも使用され、類似の名称で呼ばれる。しかし、すべてが同様に普及しているわけではなく、例えばドゥイはオロチと松花江のナーナイ（赫哲）に限定されているが、ラギとその名称は、満洲地方からヤクーチヤ北部のエヴェン、ニブフにも分布している。

罠とそれを示す語彙の分布から、罠の種類によって普及を促す要因が異なることが示唆される。例えばツングース系の言語系統全体に広まっているものは、古い時代に人びとの拡散に伴って普及したとみることができる。一方、地域的に限定されているものは、現在の言語分布確定後に普及した可能性がある。

これらの罠には、獲物の毛皮を極力痛めないような工夫がみられる。このように良質の毛皮を求める罠が発達・普及する背景には、毛皮交易の活性化があったと思われる。中国への貢納品、あるいは漢族商人との取引の材料として、良質の毛皮を確実に手に入れることがアムール、沿海地方、

樺太の住民に求められたのである。

#### ■ウラジミール M. ヌタユルギン

（コリヤーク郷土博物館）

##### 「コリヤークの漁撈：漁具と漁法」

コリヤークはカムチャツカ半島の先住民であり、現在コリヤーク自治管区に約7,000人が居住している。コリヤークは魚の豊富な川や湖、海岸近くに定住し、漁撈、海獣狩猟、トナカイ飼育を生業としてきたが、主要な食物である魚類を得るためにさまざまな漁具・漁法を発達させてきた。

漁撈の中心はサケ類であるが、ホッキョクイワナなどの淡水魚、イワシ、コマイ、カジカなどの海水魚も漁獲対象となっている。

伝統的な居住地では、毎年地元行政府の許可を得て一定量のサケ類を捕獲し、干物や塩漬けに加工するほか、イヌの餌として利用している。

河川を遡上するサケ類、ホッキョクイワナなどは、さまざまな種類の籠罠（fish trap）、罌で捕獲される。また、これらの魚が浅瀬をとおり際に、棒で頭を叩いて捕獲する漁法もみられる。

冬には凍結した川の氷の下に網を仕掛け、キタカワヒメマスなどを捕らえる。また、小河川では、秋にホッキョクイワナが群れている場所を覚えておき、凍結後氷に穴をあけて捕獲する。海では、氷に穴をあけ、近づいてきたコマイを鉤で引っ掛ける漁法がみられ、3月には氷の裂け目を利用したカジカ釣りがおこなわれる。

漁網はかつてイラクサ製のものが使用され、その製作には多大な労力が要された。近年、工場で大量生産されるようになってから、網漁は大きく発達した。



#### ■エヴドキヤ M. サドヴニコヴァ

（カブラン中級学校）

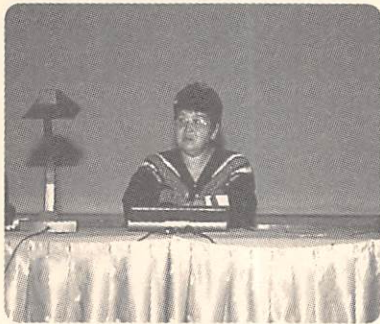
##### 「イテリメンの過去と現在の伝統的生業活動の展望」

イテリメンは、かつてカムチャツカ半島全域に20,000人が居住し、漁撈、採集、海獣狩猟を主要な生業としてきた民族である。現在は、おもにコリヤーク自治管区ティギル地区に約1,000人が生活している。



18世紀前半のイテリメンの生業基盤は、サケ類の遡上期に河川でおこなわれた漁撈であった。漁撈に次いで重要なのは、女性による採集で、イテリメンは植物に関して豊富な知識を持ち、いろいろな植物の葉、根、果実を食用・薬用、ゴザや籠などの素材として利用した。海岸の定住者にとっては海獣狩猟も重要な生業であり、アザラシ類・クジラ類の肉・脂肪を食物や燃料として、皮を衣服・靴、日用品の素材として利用した。陸獣の狩猟は副次的な生業であり、オオツノヒツジ、トナカイなどが食物や日用品の素材として捕獲されたほか、クロテン、キツネの毛皮はヤサク（現物税）や交易にもちいられた。

このように、自然と一体化していた伝統的なイテリメン文化は、現在消滅の危機に瀕している。また、大量の失業者による森林の乱伐や密漁は、伝統的な生活の基盤自体を揺るがしている。こうした問題を解決するためには、言語・文化を保護し、伝統的生業に立ち返る必要がある。イテリメン語教科書の出版や伝統的な歌謡・伝承の収集、さらに伝統文化保存のために民族博物館の建造が望まれる。



■大島 稔（小樽商科大学）  
「カムチャツカ先住民の生業にみる

#### アイヌ文化的要素」

アイヌ文化の起源やその形成、狩猟採集文化における類型などの問題を検討する際には、文化を担う人びとの移住、環境適応、他民族との接触・交流を考慮する必要がある。これらの要素を同時に比較できるのは隣接地域であるが、今回の発表では、カムチャツカ半島の諸民族文化とアイヌ文化について、特にサケをめぐる文化要素を取り上げる。

北方沿岸文化圏は、サケ類の利用とそれに基づく定住生活によって特徴づけられる。アイヌ、カムチャツカ半島のイテリメンや海岸コリヤークは、海岸や河川沿いに定住し、恒久的住居の附属施設

として高床式倉庫を持つ点や、季節的な狩猟・漁撈小屋を持つ点で共通している。

漁具にも多くの共通性がみられる。鉤鉚は、アイヌ、イテリメン、コリヤークのほか、サハリン・アムール地域の諸民族にもみられ、名称もアイヌ語と類似したmarekまたはmarikである。籠篋、築にも同様の構造のものがみられる。

また、アイヌは、サケに関連した儀礼として初漁儀礼、終漁儀礼、前漁儀礼などをおこなってきたが、イテリメンやコリヤークの文化にもそれぞれに対応する儀礼がみられる。

このように、アイヌとカムチャツカ諸民族は多くの文化要素を共有し、その多くがアムール地域にもみられることから、北方沿岸文化圏内にオホーツク海沿岸文化圏というサブゾーンを設けることも可能であろう。

#### ■渡部 裕・中田 篤（北海道立北方民族博物館） 「サケ漁具・鉤鉚の系譜

##### —本州からカムチャツカまで—

北太平洋沿岸の諸民族は、豊富なサケ資源を利用して豊かな文化を築いてきた。本発表では日本の本州北部から北海道、サハリン、アムール川下流域、カムチャツカ半島における突き取り具の機能と特性について紹介する。

シロザケは、本州北部でも古くから漁撈対象となっており、特に河川でさまざまな漁具・漁法が発展してきた。これらの漁具のうち、鉤やヤスなどの突き取り具のなかには、魚体に刺さると柄から抜ける離脱式のものがみられる。このような離脱機構は、大型魚種を取り込む際の衝撃を緩和し、漁具の破損や取りこぼしを防ぐ機能を持つと考えられるが、こうした構造は北海道以北の地域のみみられる鉤鉚とも共通している。

鉤鉚は、アイヌ、ニブフ、エヴェンキ、カムチャツカ半島の諸民族などにみられる突き取り具である。鉤の先が前方を向くように柄先に鉤を半固定した状態で使用され、鉤は魚体に突き刺さると柄から離脱する。手前に引くタイプの鉤は、あらかじめサケが潜む可能性の高い水中に入れておく必要がある。一方、鉤鉚は舟や徒歩で移動しながらサケを視認して上から突くことができるため、サケの遡上量が多い地域では捕獲効率が高かったと思われる。鉤鉚が環オホーツク海沿岸に広くみられることは、この地域における文化交流を示唆している。

（学芸課 中田 篤）



# 「魚と暮らし—アイヌとその周辺民族の漁撈文化」

第4回 10月4日(木) 19:00-20:30

「川の民の美しい文様」

衣類や道具にこめられた意味

講師 笹倉いる美(当館学芸員)

第4回目ではアイヌとサハリン・アムール流域に暮らす民族の、主に衣服に施された文様について紹介しました。

文様は意味をもっている。それはその時代や地域や民族に特徴的な装飾であるというだけでなく、家系を表したり、魔除けのためだったり、もう少し具体的なことがある。

このため文様は資料から情報を得る際の、大きな手掛かりとなるし、例えば衣服の材料や形は同じでも、文様の違いで名称が異なってくることもある。

アイヌやサハリン・アムール流域の民族に共通してみられる文様は曲線を主体としており、要素の一つには渦巻き文様がある。しかし細かくみると、その渦巻きも少しずつ違っていることがわかる。

また文様の置き方も注目したいことである。渦巻きは世界各地でみられる文様である。個々の要素だけではなく、その配置や他の要素との組み合わせに特徴がでてくる。アイヌは衣服の裾、袖口のほか背中等にも大胆に文様を施す。しかしウイルトタの場合は襟や裾口だけである。ナーナイでは普段着は襟、袖口だけであるが、晴れ着になると腰や背中にも美しい文様を施している。

次に文様を付ける技法である。アイヌの場合は刺繍とアップリケが基本的な文様の付け方であるが、ウイルトタでは刺繍だけで、ナーナイだとアップリケの逆の型抜きや、芯をおいてそれを糸でくくってゆくという技法がみられる。



ナーナイの文様の付け方  
(型ぬきしたふちを糸でくくる)

第5回 10月14日(木) 19:00-20:30

「魚をめぐる精神文化—豊漁を祈る心—」

講師 中田 篤(当館学芸員)

第5回目では、北太平洋沿岸の食文化のなかで重要な役割を果たしてきたサケ類を取り上げ、その漁撈に関する精神文化を紹介しました。

アイヌの初サケ儀礼は、漁期の最初に捕獲されたサケを迎え、サケを支配する神に豊漁を祈願する漁撈儀礼である。ヒグマやシマフクロウが「動物の姿を借りた神」であるのに対して、サケは「神が遣わした魚」であるため、個々のサケについて形式化される儀礼は少ない。しかし、日常の漁撈に儀礼的な要素が含まれており、魚叩き棒による魚叩行為によってサケの靈魂を神の世界に送り、蘇生させることができると考えられてきた。

一方、北海道に隣接する本州北部では、サケとエビス信仰につながりがみられる。エビスは異界から人間世界に來臨し、漁獲をもたらす神とされているが、日本海側の地域では、魚叩き棒がエビスポウと呼ばれ、サケを叩く際にエビスの名を唱える習慣がみられる。また、山形県を中心に、サケの王や<主>が毎年決まった日に川を遡るという「サケの大助譚」伝説が分布している。これらの習慣や伝承から、サケが人間界と異界とを結ぶ存在であるといった自然観が伺われる。

北アメリカの北西海岸インディアンは、漁撈の成功を祈念するため、自然界を支配する<主>の姿を魚叩棒に刻み込んでいた。また、サケは海中では人の姿をしている<サケの人びと>であり、時期が来ると魚に姿を変えて川を遡ると考えられてきた。初サケはサケの首長あるいは斥候で、その扱いが悪いと他のサケが遡上しないとされ、初サケ儀礼でサケの骨や皮、内臓を海や川に流したり、散逸しないように火にくべることによってサケが再生すると信じられていた。

これらの精神文化に共通して見られる「二つの世界の往来」や「生命の再生」といった概念は、北方諸民族に広くみられる<主>の観念と、海と川を往復するサケの生活史に関する知識が結びついた結果として生まれたものではないだろうか。



## オホーツク文化遺跡の立地

講師：角 達之助（当館学芸員）

第6回目 10月21日（木）19：00～20：30

「魚の利用・価値 あれこれ

食べる・着る・肥やすー」

講師 齋藤 玲子

最終回は、これまでのセミナーであまり触れることのできなかった「魚油」「魚皮」「肥料」「交易」「先住民文化と漁撈文化の現在」について、紹介しました。以下に概要を示します。

アイヌはタラやイワシなどから油を採り出して調味料のように利用していたが、アイヌのみならず、穀物の採れない北方地域の民族にとって魚油は重要なエネルギー源となっていた。また、灯明用の燃料としても利用されていた。北アメリカの北西海岸インディアンでは、キュウリウオ科の「ユーラコン」と呼ばれる魚から採った食用の油が貴重な交易品となっており、「富」として蓄えられていた。現代でも祭の際に食されていることをビデオや実物で紹介した。

サケ・マスをはじめとする魚皮は、北海道のアイヌでは靴に、サハリンやアムール川流域の民族では衣類全般に用いられていた。アラスカのユーコン川流域のイヌイトにもサケ皮製のパーカやフードが知られている。

近世をとおして、サケ・ニシン・昆布は本州向けの主要交易品となっており、中国向けの煎海鼠・干鮑・鱗鱗も高価な商品として重要視されていた。近世後期には、西日本の藍、菜種などの商品作物栽培のため肥料として粕の需要が増し、北海道産ニシンの魚肥が大量に生産されるようになった。これはアイヌに過酷な労働を強いる原因となった。

現在は、商業経済のなかで先住民の大部分が漁業のみを営んでいるわけではないが、漁撈文化は生き続けていると言ってよいだろう。北海道では初サケを迎える儀式が各地で復活してきており、魚料理が伝承されている。また、サケをテーマにした水族館なども観光客の人気を得ており、漁撈をとおして先住民の暮らしの知恵を学ぶなど、環境教育に役立てようとする動きもある。利用形態を変えながらも、アイヌとその周辺の民族にとって、魚の価値は重要であり続けるに違いない。

本講座では、5世紀頃に大陸から北海道のオホーツク海沿岸に渡来し、10世紀頃に姿を消したオホーツク文化を担った人びとについて、遺跡から出土する遺物を通して、その生活環境や生業、大陸との交流、信仰などについて紹介しました。以下でその要旨をお知らせします。

オホーツク文化という独特の文化を形成した人びとは、5世紀頃に大陸のサハリンから北海道北部へ渡来し、以後10世紀頃までに北海道東部、千島列島のオホーツク海沿岸地域にまで拡散していった。各地域の遺跡からは、アザラシやトドなどの海獣類やホッケ、サケなどの魚類の骨、ウニやホタテ貝などの貝殻が数多く出土している。彼らは海獣類、漁撈を中心として生活していた。

中でもアザラシなどの海獣類は、食料としてだけでなく、毛皮が防寒具としても利用されていた。この毛皮は、大陸との交易品としても利用されていたようだ。遺跡からは、大陸に由来する青銅製帯金飾りやガラス玉などが出土することがあり、これらの品々は、毛皮を中心とした大陸との交易によって手に入れたのであろう。

ところで、オホーツク文化の遺跡からは、動物を描いたさまざまなものが出土している。クジラなどの海獣類が刻まれている土器、動物の骨や角で作ったオットセイやクマの彫刻品、また人が舟に乗ってクジラ猟をしている場面を線刻した針入れなどがある。さらに住居内に祭壇的な場所を作り、そこにはクマの頭骨を中心に、陸獣類、海獣類の骨を意識的に並べ、積んでいる。この場所を「骨塚」という。これらのことにより、オホーツク文化人たちの、動物に対する意識が非常に高かったといえる。

オホーツク文化を担った人びとは、海岸沿いに暮らし、舟をたくみに操り海洋を移動し、自然のめぐみを大いに利用しながら生活していたことがうかがえる。



## サハの口琴コンサート

10月9日  
会場：当館ロビー

ロシア連邦のサハ共和国から演奏者を迎え、口琴のコンサートを開催しました。

口琴は、手のひらに乗るほどの大きさの楽器で、振動弁を弾いた音を口内で共鳴させて演奏します。サハ（旧称ヤクート）の口琴は、「ホムス」と呼ばれる金属製のものですが、同様の構造をした口琴は世界各地でみられ、アイヌのムックリもその一種です。

演奏者はイワン・アレクセイエフ氏とスピリドン・シシーギン氏のお二人です。アレクセイエフ氏は、国際口琴センター代表を務める口琴研究家、シシーギン氏は国際大会で世界口琴名人に選出されるなど、二人とも国際的なホムス演奏家です。今回は、塘路口琴研究会「あそう会」の招きで来日したもので、当館でのコンサートは平成5（1993）年に続いて2度目となります。

コンサートでは、それぞれの独奏や二人の合奏で「レナ川」、「ツンドラ」など10数曲が演奏されました。世界各地の口琴を使った演奏や、「あそう会」会員・磯嶋恵美子さんの演奏するムックリとの競演など盛り沢山の内容で、曲の合間には、サハ共和国の自然と文化の紹介などもおこなわれました。

コンサートに集まった約90名の聴衆は、神秘的な口琴の音色に聞き入っていました。また、当日会場では、コンサートに合わせてサハの児童画の展示もおこなわれました。

（学芸課 中田 篤）



## 今号の表紙 —アザラシ胃製容器—

オホーツク海沿岸に住む人びとは、縄文時代から食料、防寒具、交易品として海獣類を十二分に利用して生活してきた。

「アザラシ胃製容器」は、そうした人間の工夫が生んだバリエーションの一つである。よく洗って乾かした胃袋の両端を糸で堅く結んだり、木の栓をしたりして蓋をする。防水性・密封性に優れているこの容器は、油や水など液体の保存・運搬用道具として使用していた。胃袋のほかに、腸や食道、膀胱などを使うこともある。

表紙の容器は、アイヌの人びとが使用していたものであるが、海獣類の内蔵製容器は北方に暮らす人びとに広く愛用されている。海獣の油は、調味料あるいは燃料など多くの利用法があり、それを蓄えるための内臓製容器は北方に住む人びとにとって生活必需品であったと思われる。

みんぞく こうこ はくぶつかん  
in 北海道

このコーナーでは当館の活動に関連する分野の新聞記事のうち、道外ではあまり紹介されていない情報を掲載します。

- 10/3 アイヌ文化伝承の会・手作りウタラ主催の「アイヌ文様作品展」開催、札幌市/D
- 10/9 北海道と沖縄の民俗・文化的な類似性を考える「アイヌとヤンバルをつなぐ文化交流の夕べ」開催、札幌市/D
- 10/9 ウサクマイN遺跡の擦文文化期の地層から律令時代の貨幣が出土/Y
- 10/10 世界の先住民が集い、交流を深める「先住民国際フェスティバルin白老」開催/AS
- 10/20 「オホーツクミュージアムえさし」が10/29に開館、枝幸町/D
- 10/23 白糠アイヌ文化保存会主催により、アイヌの伝統的漁法の「マレック漁」再現/M
- 10/27 恵庭カリンバ3遺跡で縄文後期の腰飾りのひもが出土、恵庭市/D
- 11/26 北海道ウタリ協会主催による「第12回アイヌ民族文化祭」開催、千歳市/M
- 12/17 江戸時代中期のアイヌ風俗画絵師、小玉貞良の直筆絵巻をオーストラリアで発見/D

\*AS：朝日新聞、D：北海道新聞、  
M：毎日新聞、Y：読売新聞  
複数紙掲載の場合は抜きの大きい方を紹介しています。



## ■寄贈資料紹介

- ・札幌市の西沢敏氏からチュクチのトナカイ毛皮製衣服、トナカイ毛皮製靴、トナカイ皮製衣服各1点が寄贈されました。
- ・ロシアのY.M.スタユルギン氏からコリヤークの鉤銛かぎもりの先、疑似釣針各1点が寄贈されました。
- ・ロシアのE.M.サドヴニコヴァ氏からアイヌアイヌ櫓模型、牙製彫刻各1点が寄贈されました。
- ・ロシアのA.P.スタルツェフ氏からウデへのワナ等を描いた水彩画9点が寄贈されました。

## ■執筆・出版社から贈呈を受けた書籍等

- ・横須賀孝弘1999『目録・北米インディアンの本-1951~1998-』横須賀孝弘
- ・横須賀孝弘1999『モノ・マガジン391』ワールドフォトプレス
- ・奥田統己1999『アイヌ語静内方言文脈つき語彙集』
- ・池勇夫1999「エトロフ島-つくられた国境-」吉川弘文館
- ・北海道新聞社1999「摩周屈斜路-巨大カルデラの森と湖-」北海道新聞社
- ・北海道新聞社1999「サハリンの蝶」北海道新聞社
- ・松山利夫1999「先住民と都市-人類学の新しい地平-」青木書店
- ・北道邦彦1999「ノート版アイヌ神謡集」北道邦彦
- ・北地文化研究会1999『アイヌ民族関連研究論文翻訳集』北地文化研究会

## ■主な来館者

10/5(火) 東京都埋蔵文化財センター  
調査研究部 小林 裕 氏

## ■その他の行事報告

- 11/27(土) 博物館クラブ「北方民族のワナ」
- 12/11(土) 博物館クラブ「北方の文様で作る年賀状」
- 12/24(金) ロビーコンサート



## ■観覧者動向(10~12月)

	常設展示
10月	2,427
11月	1,260
12月	376
計	4,063名

## ■企画展

「北の海と川のめぐみ  
—縄文文化からアイヌ文化まで—」  
北海道のオホーツク海沿岸は、海の幸、川の幸が豊富な地域です。この地域の遺跡からは、貝類や魚類、海獣類の骨が多く出土します。また、それらをつかまえるために、石や動物の骨で作られた漁撈つり道具なども出土しており、人びとは、遠い昔から海、川の幸を利

用して生活していたことがわかっています。本展では、縄文文化期からアイヌ文化期まで、北海道のオホーツク海沿岸地域で海や川のめぐみを利用した人びとの生活について紹介します。

開催期間：2/1(火)~3/20(月・祝)

休館日：月曜日(3/20は除く)、  
2/17(木)

観覧料：無料

## 関連事業

講座「北の海と川のめぐみ」

2/19(土) 13:30~16:00

講師 佐藤 孝雄 氏

(常葉学園富士短期大学講師)

村木 美幸 氏

(財団法人アイヌ民族博物館学芸員)

## ■行事案内(2~3月)

2/12(土) 講習会「鹿笛の歴史とはたらき」

3/11(土) 博物館クラブ「かんじきで歩こう」

## ■編集後記

網走に移り、博物館へ勤めるようになって3ヶ月が経ちました。この間、出張先で多くの道内博物館関係者にお会いすることができました。恥ずかしながら、行ったことのない博物館の方が大半でした。これから時間を作って一つ一つ博物館を回ってみたいと思っています。今までは観覧者として博物館に遊びに行っていました。これからは学芸員としての自分も連れていきたいと思っています。(角)